View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

東京音楽大学リポジトリ　Tokyo College of Music Repository

「Tokyo College of Music」五線紙の記憶をたどる

著者	田所 裕子
雑誌名	ライブラリーレポート
号	5
ページ	75-82
発行年	2017
出版者	東京音楽大学付属図書館
ISSN	2188-4706
著者版フラグ	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001259/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

「Tokyo College of Music」五線紙の記憶をたどる

東京音楽大学付属図書館
田所（信時）裕子

「Tokyo College of Music」五線紙の調査に至る経緯

2017年10月29日、日本音楽学会第68回全国大会で、「大正～昭和前期　五線紙による作曲年代判定の可能性――信時潔文庫整理を終えて」という発表（発表者:信時裕子）を行った。作曲家・信時潔の自筆譜の整理過程で、作曲家が使用している五線紙が、作曲年代等の判定の参考情報に成りえることを、実感していた。同文庫整理で集めた情報だけで、「日本の五線紙」のすべてを網羅することはできないが、今後他の作曲家研究、図書館・資料館の所蔵資料と合わせて、なにか手掛かりになるであろうと、とりあえず東京芸術大学附属図書館所蔵・信時潔文庫の五線紙にどんなものがあるか、をまとめて発表したものである。大正時代から昭和30年代にかけて、一人の作曲家が使用した、または身近にあった五線紙[1]のうち、他と容易に区別できるもの――すなわち、五線紙の製作・販売会社、あるいは五線紙を提供、利用する組織や個人名が、文字や記号、数字などで記載されたもの――を対象に調査した。その結果、「共益商社」関係が25種、「文房堂」「高井楽器店」「日本放送協会」などの表示がある五線紙が、国内外、個人名の例もふくめて91種あった。学会発表当日、質疑応答で、音楽大学などで作った五線紙についての質問を受けた。信時文庫で、該当するのは「東京芸術大学」の名入りの五線紙だけだった。が、もうひとつ気になっている事例が、東京音楽大学Tokyo College of Musicの名入りの五線紙（以下、「Tokyo College of Music」五線紙と表記する）だった。信時潔は戦後の東京音楽大学と直接のかかわりはなく、この五線紙の利用実績はない。しかし、「Tokyo College of Music」五線紙については、かつて私が財団法人日本近代音楽財団の日本近代音楽館で、武満徹文庫の整理に関わっていた折に、目にしていた。

東京音楽大学付属図書館に着任して5年目の今年、五線紙調査の延長として、これを調べてみることにした。

「池野成自筆譜コレクション」に見る「Tokyo College of Music」五線紙２種

まず、東京音楽大学付属図書館蔵書の中で当該五線紙を探したところ、「池野成自筆譜コレクション」に、その五線紙が含まれていることがわかった。作曲家･池野成（1931-2004）は、東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）の作曲科に入学し、池内友次郎、伊福部昭に

[1] 数は多くはないが、東京芸術大学附属図書館所蔵・信時潔文庫にある門下生や他の作曲家等が書いた、または使用した五線紙を含む

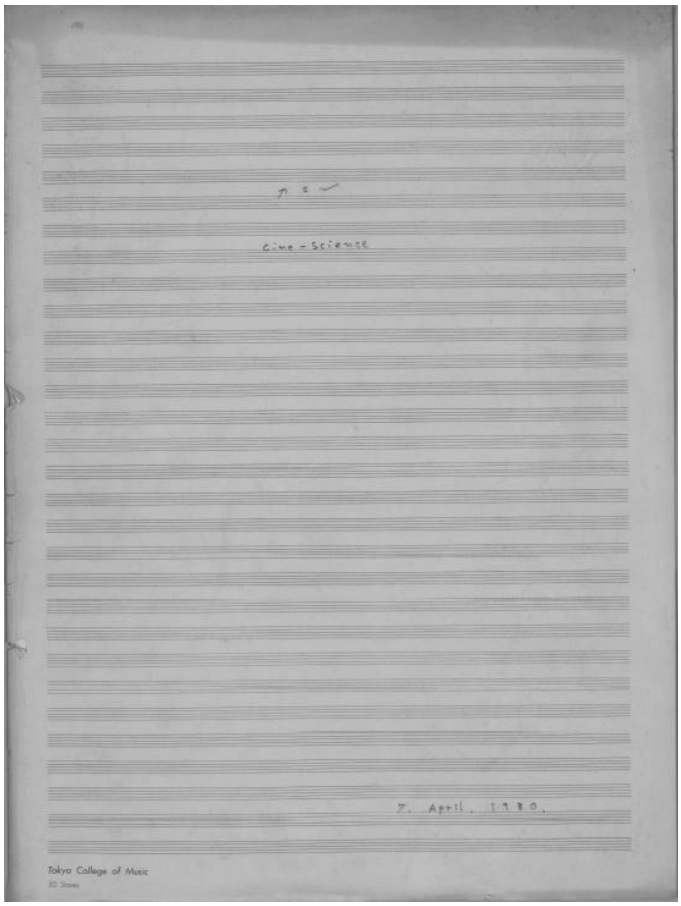
師事。1953 年、伊福部昭の退任に伴い東京芸術大学を中退。管弦楽曲〈序奏と交響的アレグロ〉などのほか、「女のみづうみ」「白い巨塔」など数多くの映画音楽等を手掛けた。東京音楽大学では、作曲及び管弦楽法の講師を務めたほか、付属民族音楽研究所において伊福部所長の下で研究員として勤務した。池野成と同じ旧制青山中学校出身の作曲家で、同じ伊福部門下だった今井重幸（1933–2014）の尽力で、東京音楽大学付属図書館に映画音楽関係資料が寄贈されたのは 2013 年。のちに、純音楽資料と管弦楽法に関する原稿が図書に寄贈された。[2]　図書館では、作品資料の整理を進め、「池野成自筆譜コレクション」のサイト[3]をオープン、2017 年 7 月よりデジタル化と目録整備が完了した資料の館内閲覧[4]を開始した。

同コレクションには、五線が両面に印刷されたものと、比較的薄手で五線が片面に印刷されたものの 2 種の「Tokyo College of Music」五線紙が含まれていた。以下の〈Omaggio〉が両面印刷、〈カエル〉は薄手の片面印刷の使用例である。

Omaggio a Maestro
A.IFUKUBE / Sei Ikeno

手稿譜（自筆スコア）
五線紙「Tokyo College of Music」（30 段 両面印刷 39 × 29㎝）7 枚各二つ折　14 fols.
* 編成：室内 orch
* 楽譜末尾の日付「1988 Tokyo」

【閲覧用請求記号 XEM8.8DROM/Ｉｋ 3-1/9】

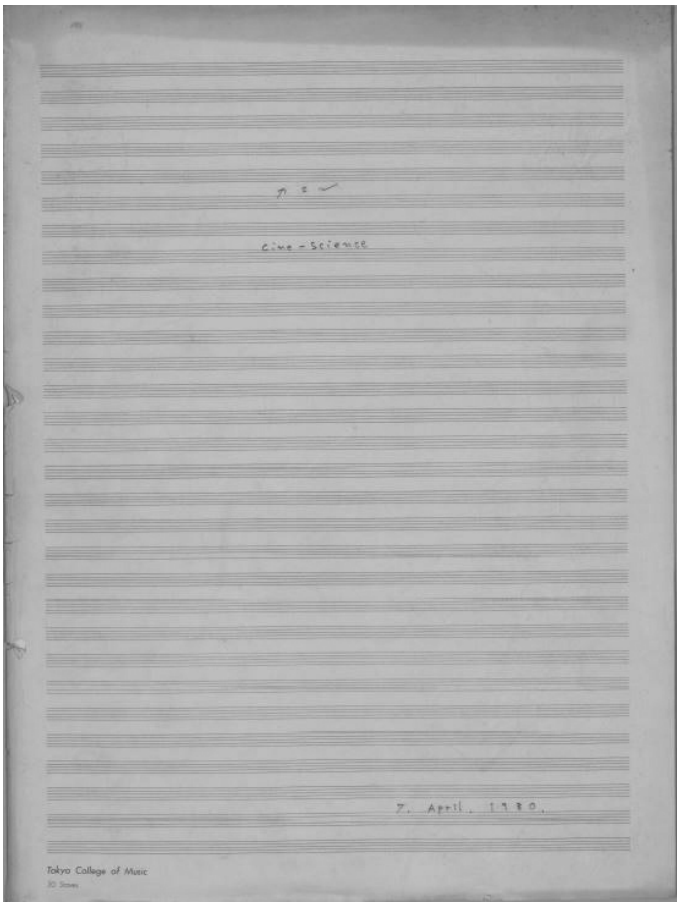


[2] 寄贈の経緯、資料の概要は鳥海高広「池野成自筆譜コレクションについて」『ライブラリーレポート』第 4 号（2017.3）に詳しい。
[3] 池野成自筆譜コレクションサイト　http://tokyo-ondai-lib.jp/collection/ikeno/
[4] 学外者の閲覧は事前予約を要する。

カエル：Cine-science / [池野成]

手稿譜（自筆スコア）
五線紙「Tokyo College of Music」（30 段 片面印刷 39 × 29㎝）9 枚各二つ折　18 fols.
* 科学映画「カエル 遺伝発生学の開拓」（1980）の音楽
* 表紙に「7. April. 1980」の記載あり

【閲覧用請求記号 XEM8.8DROM/Ｉｋ 3-1/9】



伊福部昭、池野成門下、永瀬博彦インタビュー

この五線紙について、伊福部昭、池野成の門下で学び、その後、東京音楽大学職員として勤務している現総務課長・永瀬博彦に話を聞いた。[5]

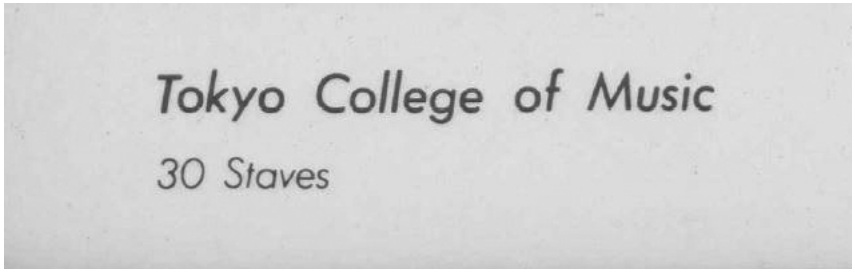
まず、なぜ「Tokyo College of Music」五線紙が出来たのだろうか。

「伊福部先生の発想なんです。」
「学生にとって、市販の五線紙は高いんですよ。」（以上、永瀬）

永瀬はウェブサイト「伊福部昭公式ページ（暫定版）」[6] に掲載されているオリジナルエッセイ「雑司が谷の伊福部昭①～⑥」で、師・伊福部昭（1914–2006）について熱く語っている。今回のインタビューでも、五線紙の話から、伊福部昭の音楽論に広がっていったのだが、ここでは、五線紙に関わる部分に絞って紹介したい。伊福部昭が東京音楽大学に着任したのは、

[5] インタビュー実施日　2017 年 12 月 21 日
[6] 伊福部昭公式ページ（暫定版）https://www.akira-ifukube.jp/　（2018 年 2 月 8 日確認）

1974 年。主任教授として作曲科で教え、1976 年から 11 年間は、東京音楽大学の学長を務めた。伊福部の着任後、松村禎三、三木稔、池野成、湯浅譲二、池辺晋一郎、三枝成彰らが教師陣に加わり、作曲科は活気を帯びた。その当時、「作曲とはこういうものだ」と教えた伊福部のこだわりの一つが五線紙に現れた。



池野成〈Omaggio〉自筆スコアより

「デッサンとかスケッチでつかうものは、裏に五線が書かれていないものを使うんです。ペラペラなんです。」

「そういうものを、テープで止めて長くつなげる。時間芸術だから、流れを何回も確認する。それをまた写したり、書き直したりする。」

「裏が無くてペラペラ。薄くて安いから、いくらでも書き換えられる。長く横につなげると時間の流れが確認できる。それには、片面の五線紙が使いやすかった。作曲とは時間芸術の構築物。書いていくうちに、ここはbisとか、ここにもう少し入れようとか、ここはカットとか、いろいろ出てくる。作曲家は職人みたいなもの。」（以上、永瀬）

伊福部の発案で作られた「Tokyo College of Music」五線紙が、正確に何年から販売されたのか、残念ながら確認する手立てがなく、伊福部着任の 1974 年以降、としか言えそうもない。作曲科の学生たちに安く提供するために、「Tokyo College of Music」五線紙が作られ、大学内の売店で販売するようになった。現在と違って、当時は売店も大学が経営していた。在庫がなくなると、印刷屋に注文していたという。

「伊福部先生も、買って使っていました。清書するときはちゃんとした市販のものを買うんだけれども、その前段階では東京音大のを使ってました。」（永瀬）

伊福部作品で、「Tokyo College of Music」五線紙が使われているのなら、是非確認したいと考えたが、永瀬が語っているようにスケッチの段階で使っても、清書する際には市販五線紙に書いたかもしれない。スケッチまで手元に残しているかどうかは、作曲家によって、作品によって様々である。伊福部の作品リストで、1974 年から 1987 年頃（もちろん東京音楽大

学退任後に使う可能性もあるが）の作品を眺めてみたが、管弦楽作品だけでもかなりの数がある。公開されている作品リストや目録類、図書館・資料館の目録では、五線紙まで確認することができない。明治学院大学図書館内にある遠山一行記念日本近代音楽館には、伊福部家から提供をうけた伊福部昭自筆譜の資料画像（全作品ではなく、一部作品だと思われる）を閲覧することができると聞いたが、作品名を具体的に指定して、資料画像の有無を問い合わせないと、閲覧の可否の回答ができないという。現段階では、伊福部作品に「Tokyo College of Music」五線紙が使われている例を、探し当てることができなかった。

関連年表

1974 伊福部昭、作曲科教授となる
1976 伊福部昭、第5代学長となる
1987. 3 伊福部昭、学長退任
1994. 3 J館竣工
2005. 7 A館起工式 ＊
2007. 3 A館竣工式

＊五線紙を販売していた「売店」があった旧校舎を取り壊して、A館が建てられた

では、「Tokyo College of Music」五線紙は、いつ頃まで販売されていたのだろうか。

「自然消滅です。伊福部先生がおやめになったのが 87 年。そのあとは、在庫を売り切って。あるいは追加注文したかもしれないけれど。要するに伊福部先生が、作曲とはこういうもんだよ、と直接教えた時代から少しづつ離れていった。」（永瀬）

1987 年頃に作曲科の学生として在籍していた図書館職員は、その五線紙があったこと、学内の売店で販売していたことを覚えていた。当時は大学内の売店で売っていたが、その後校舎の建て替えでその売店もなくなった。旧売店の最後の日まで売っていたかどうかは定かではないが、新しく 100 周年記念校舎（A館）が完成し、売店も外部業者が入るようになり、「Tokyo College of Music」五線紙の販売は無くなっていた。

「厚口の両面 30 段の五線紙と、薄口の片面 30 段のものがあって。それとパート譜用の 10 段とか、12 段とか、20 段ぐらいまであったかな。学生なんかは自分でパート譜なんかを書かないといけないこともあったから。でも、そういうものはほとんど使わずに、作曲の学生はもっぱら薄口片面 30 段の五線紙を使った。両面刷りのものもヤマハなんかで買うよりはずっと安かった。大学は儲けなしで印刷屋に頼んでいたから。」（永瀬）

今のところ、「パート譜用」の10段、12段、20段などの実物は確認できていない。採算を考える必要もなく、在庫がなくなると印刷屋に注文していたというから、小ロットで、数種類を注文していたことはあったかもしれない。

「音大以外の人でも、これはいい、と言って買っていった人はいたと思います。安いし。高い売り物の五線紙だと、簡単に書きなぐって捨てることがちょっとはばかられるところがある。何度も何度も書き直したり、同じものを書いて、きたなくなったら書き直して、とやるわけです。」（永瀬）

武満徹文庫

さて、音大以外の人でも使っていた、という話が出てきた。冒頭に書いた通り、私もこれには心当たりがあった。そこで改めて、現在明治学院大学図書館内にある、遠山一行記念日本近代音楽館に問い合わせた。

武満徹（1930-1996）文庫の資料整理はまだ完全に終わっていないが、今まで整理した中では、「Tokyo College of Music」五線紙を使っている手稿譜は、データ数で100件以上ある。「波の盆」などの映画音楽が多いが、〈ソン・カリグラフィ Le son calligraphie〉〈うたSongs〉などのいわゆる純音楽もあるという。その手稿譜は自筆と他筆[7]の両方があり、スケッチも浄書と言えそうなものもあり、と様々なケースがある。つまり、特定の作品のために「Tokyo College of Music」五線紙を使用した、あるいは特定の浄書担当者が使用していた、というようなことではなく、ある程度長い期間にわたって、武満の手元にその五線紙があり、30段の五線紙が必要になったときにはそれを取り出して使っていた、ということだろう。かなり大量に入手して使用していたようだが、武満徹と東京音楽大学は直接の関りはなく、どのような経緯で入手したのかは不明である。武満文庫は整理途中のため、これ以上詳しく確認はできなかった。今後目録整備が進めば、五線紙の使用年代についても、もう少し絞り込んでいくことができるだろう。

池辺晋一郎と東京音楽大学学生の五線紙

池辺晋一郎（1943-　）は、1974年に東京音楽大学講師となり、1987年から2014年まで教授を務めた。 客員教授であった2017年8月、読売新聞の連載記事で「勤めていた音楽大学」のこととして、次のように書いている。

---

[7] 毛利蔵人（1950-1997）などが浄書を担当していたといわれているが、個々の手稿譜（他筆）の筆者については、確証がない。

作曲科の学生が自分たちの注文仕様による五線紙を作りたいという。その援助のため僕も何がしかの出資をした。いざできあがった品は厚手にして極めて上質。僕はちょうど作曲にかかっていたオペラを、その五線紙で書いた。ところが・・・・。上演に３時間近くを要するオペラのスコア（総譜）は、数百ページに及ぶ。上質の紙で書きあがったそのオペラの全曲は、ひとりの力で持てる重さではなかった。

（池辺晋一郎「耳の渚――五線紙と歩む作曲家人生」『読売新聞』2017 年 8 月 19 日）

勤めていた音楽大学とは、もちろん東京音楽大学だが、ここに書かれている五線紙が、東京音楽大学の売店で販売していた「Tokyo College of Music」五線紙のことなのか、ご本人に直接尋ねたところ、それとは違うことがわかった。「何がしかの出資」をしたのは、当時の学生に対してで、「Tokyo College of Music」五線紙があったこと、それを売店で販売していたことなどは、まったく知らなかったという。文中にある「上演に３時間近くを要するオペラ」とは何か伺ったところ、広島オペラ・ルネッサンスで初演されたオペラ〈じゅごんの子守唄〉で、1996 年に作曲、初演されたものだった。1987 年に伊福部昭が、東京音楽大学学長を辞めたあと、売店の五線紙の在庫を売り切って、「自然消滅」したという永瀬の言質と、さほど矛盾しないだろう。確証はないが、売店で入手できなくなった学生が、教員に「何がしかの出資」を求めて、新しく五線紙を作ったのかもしれない。伊福部学長以来の五線紙に関するこだわりは、学生の中にも残っていたのだろう。

もっとも、同記事によると、ひとりで持てない、練習にも持参できないほど「重い」オペラのスコアは、しかるべき業者に依頼して薄手の紙へコピーして使うことになった、ということなので、初演団体に楽譜が残っていたとしても、東京音楽大学の学生が作った五線紙原本は確認できないことになる。なお、池辺が現在日常的に使っている五線紙は「薄手の紙の片面版。裏面は白紙だ。二つ折りにして使うから、1 枚が 2 ページ。このほうが両面版より使いやすい」とあり、ここにも伊福部のこだわりとの共通点がある。

林光コレクション

国立国会図書館　東京本館音楽・映像資料室で所蔵している作曲家・林光（1931–2012）手稿譜コレクションのリストに、五線紙「東京音楽大学用」とされている資料が 2 点ある。[8] リストでは「東京音楽大学用」と日本語表記されているが、実際の資料を閲覧 [9] したところ、本稿に写真を載せた池野成の〈Omaggio〉自筆譜と同じ「Tokyo College of Music」および「30

[8] 国立国会図書館リサーチ・ナビ　手稿譜及びその関連資料　http://rnavi.ndl.go.jp/avmaterial/entry/manuscript.php　にある資料リストの詳細版で確認した。（2018 年 2 月 8 日確認）

[9] 国立国会図書館所蔵の林光コレクションは、通常は事前予約の上、デジタルデータによる閲覧が可能だが、デジタルデータでは紙質・紙の厚さ、サイズ等の確認ができないため、今回は原本の閲覧を申請し、ご承諾いただいた。

Staves」と印刷された五線紙だった。1 点は、林光作曲　管弦楽曲〈徳利小（とぅっくいぐぁ）tuk-kui-gua variations from children's song of okinawa (version for piano and orchestra)〉（1979 年作曲）自筆スコアで、29 枚二つ折りの五線紙は、すべて薄手の片面印刷「Tokyo College of Music」五線紙(30 段 39 × 29㎝）である。 もう 1 点は、管弦楽を伴う合唱曲〈モーツァルト讃歌〉（1980 年作曲）[10] の自筆スコアで、6 枚二つ折りの五線紙のうち、1 枚が薄手の片面印刷「Tokyo College of Music」五線紙（30 段 39 × 29㎝）であった。ほかの 5 枚は「マルティーノ東京社製」で、縦サイズが 1㎝大きい 40 × 29㎝。「No.19-32 Staves」と書かれた 32 段の五線紙だった。「マルティーノ東京社製」5 枚各 2 つ折りの五線紙を重ねた外側を「Tokyo College of Music」五線紙で包む形で使用され、その表紙にあたるページに「モーツァルト讃歌」「林光曲」とだけ記入されている。

いずれの作品も、作曲年は、まさに伊福部学長の在任期間中だが、林光が東京音楽大学で教えたり、直接関わっていたという話は聞かない。知人を通じてか、あるいは何かで東京音楽大学に来た折か、なんらかの方法で入手し使用したのだろう。今のところ、その詳細は確認できていない。

おわりに

残念ながら、「Tokyo College of Music」五線紙の製作、販売などに関する事務上の記録などは今のところ見つかっていない。そのため、当時を知る永瀬の証言と、現在確認できる使用例を、ここに記録した。今後も「Tokyo College of Music」五線紙の、他の作曲家による使用例、あるいは当時の経緯に関する情報を集めていきたい。

（文中敬称略）

謝辞

未整理の資料に関する問い合わせにご対応いただきました明治学院大学図書館付属　遠山一行記念日本近代音楽館、問い合わせにご回答いただきました池辺晋一郎先生、手稿譜原本の閲覧にご対応いただきました国立国会図書館東京本館　音楽･映像資料室、インタビューにご対応いただきました東京音楽大学総務課永瀬博彦課長に御礼申し上げます。

[10] 前掲 URL の資料リストには「モーツァルト賛歌」とあったが、自筆譜を確認したところ、最初のページに「モーツァルト讃歌」とあったため、ここでは後者を採用した。